



號四十三第
月七年五十和昭
行發日五・回一月毎
錢五金部一價定誌本一
錢拾六金(共稅)年一
助之幸川大 總發行所
一ノ七西座銀區橋京市京東
社信通盟同 所行發

佛印に旅して

社會部 前田 雄二

佛印當局に對し、日本の強硬な援蔣ルート禁絶申入れが行はれる直前だった。私は海防唯一軒の日本人ホテル岸田國士の「牛山ホテル」に旅装を解くとブス・ブス(人力車)に乗って街を一巡する、如何にも南國植民地の港らしく、

雑然として、物憂さでも云つた様な雰囲気にも充ちてゐる。高層建築は一つもなく二階か三階迄の街だ、チャチな映画館、薄汚い酒場、活氣のある佛蘭西人のテホ、それに支那人街と安南人街、ハッキリした目貫きの通りはなく、

たゞ雑然と商店が軒を並べてゐる問題の碼頭、その紅洋沿ひの空地には、鐵材、架橋材料、得體の知れない長方形の箱など、夥しい援蔣物資の山だ、海防驛でバスポートの検査を受けて汽車に乗る。支那とよく似た感じの廣漠たる平野を二時間程走ると河内だ。河内は實に綺麗な街だ。道幅が廣く、街路樹は豊富で青々として居り、

市内所々の花園や小公園には、赤、青、黄の花々が目覚めるやうな鮮やかさで群れ咲いてゐる。典雅な大學、博物館、劇場等には如何にも文化の國フランスの面目がしのばれる。總督の官邸はまるでお城の様に廣壯で安南人の兵隊が番をしてゐる。市の中央にはプチ・ラツクと呼ぶ湖があり、これを圍

んで贅澤品を賣る店などが並んでゐる。店の賣子はフランス人か合の子の日本人好きの綺麗な娘達だ。合の子一佛印ではこの合の子が非常に多い血の混合を圖るといふのがフランス植民政策の一つで、當局はフランス人と安南人との結婚を奨励し、又フランス兵等の安南婦人との同棲を奨励した結果、

合の子の私生児が非常に数に上つて社會問題化してゐるハノイは暑い、それもカラリとしない、濕氣の多い暑さで、煙草でもマツチでもすぐ濕つて了ふ、四月頃からはもう夏の氣候になるので、日中は家々は鐵戸を閉し戸外の熱氣を入れないやりにして、天井の大扇風器を廻し始める、お役所や會社、商店は午前九時から仕事をはじめ、

十一時半には午前の仕事を終へ、晝休の時間に入る、食事が済むと町中全部晝寝だ、午後は三時から六時半迄仕事をすると終り、六時から八時迄はアペリティブ(食前酒)の時間、晩食が八時から九時になると、映畫ダンスホール・キャバレー等夜の世界が一齊に開く。

つてゐるが、安南人は廊下で立ち乍らお客を待つてゐる。その上支那人は一回二十錢のチケットだ、安南人は普通たゞでチケットは要らない。チケットをとる所でせいせい五錢だ。安南人ダンスは月給制で雇はれてゐるのだが、支那人との待遇が餘り違ひ過ぎるのは驚かされる。尤も支那人と安南人では實際智能的に文化的にそれだけの相違はあるのか、それにしても安南は自分の國ではないか。安南人といふのは可愛い民族だ。支那人の顔には癖があるが、安南人には癖がない。一般士民は未開で問題にならぬのでインテリを取りあげて言ふのだが、丁度日本人の弟と言つた感じのする顔容だ。性質は非常に柔和で温順しい。

その代り霸氣もなければ鬭争心もなく、ごく、イージー・ゴイシグな拘泥ない性質だ。長い間のフランスの壓政に向上心を奪はれ、野心を失ひ、享樂のみを覺え、全く去勢されたといつた感じだ、この安南人が極端な日本びきなのだ。拜日といつてもいい程、日本を尊敬し、日本を救世主でもあるかの様に殆ど盲目滅法な信頼を寄せてゐる。佛印に居る日本人は僅か二百五十人程度だし、日本に關する研究書、新聞等は佛印當局の禁制で入らないので、安南人の日本に關する知識は皆無といつてもいい位なのだ。日本が支那を相手にして戦争を始め、北

支を取り、上海、南京漢口を收め、廣東を押へ、海南島更にお隣の廣西に迄入つたといふ事實だけは嫌でも連中の目に入り耳に入る。だから安南人の親日感といふものは、かういふ日本戰勝の事實のみに起因し、日本は途法もなく強い國だといふ一種の英雄崇拜的な感情なのだ。といふのは安南人は支那に反感を持つてゐる徴だ。自分達の生活を樂にして自分達の經濟的發展を圖ることは華僑が居る限り不可能なことだからフランスの壓政下に喘いでゐる安南人の前に現はれたのが「新しい力」日本なのだ。

河内驛から西貢行き急行列車に乗込む。私は二等寢室だ。一つのコンパートメントに寢室が四つなのだが、私の部屋は男は私一人であと三人とも女だ。知らない男と女を一つの部屋に寝かせるなんて相當亂暴な話だ。急行で西貢まで二日二晩なのだが、汽車は眞南へ走るので次第に氣温が高くなる。窓を全部開放し室内の扇風器をかけた放しにしてゐるのだが、どうにも暑くて耐へられず、食堂車に避難して氷水等飲んで過す。

二日目になると汽車は椰子の林を通り、グロテスクな巨大な實をぶら下げたナンカカ林を抜け、支那海沿の紺碧を左に見ながらひた走る、暑すぎてまるで傍問にかけら

れてゐるやうな二晩目も過ぎると汽車はゴム林を走つてゐるそしてその日の午前西貢に着いた、亞熱帯から熱帯に入った譯だが、その陽光の強さは實に激しい、河内では皆ヘルメットを冠つてゐたのにここでは誰もソフトを冠つてゐる。余り光線が強すぎて最初は光と影の印象ばかりで色彩がないといふ風に視覚が麻痺する。西貢驛でバスホールの検査を受けてホテル・マヂエステイクに入る、早速裸になつてバスに入らうとしたら肝腎のお湯が出ない。ポイイと呼んで訊すと、立つて頭の上のシャワーを浴びるといふ、お湯などに入つたら汗が止まらないで大變だとのことだ。

兎に角着替えて食堂に出るとまるで海水浴場の食堂のやうに、男はシャツに半袖のシャツ、勿論ネクタイなし。女はこれもシャツの上は色彩の強烈なブラウス。裸の腕、裸の脚で如何にも熱帯地らしい食堂風景だ。メーン・ストリートは實に綺麗な街でこれはハノイ以上の整つたヨーロッパ風の美しさを持つてゐる。然し街全體としては不統一な無趣味さで、ハノイに美しさが全市に溢れてゐるとすれば、西貢のよさはメーン・ストリート一本に限られてゐると云へる。一流ホテルのマヂエステイクもコンチネンタルもこのリュ・キャチノにあるのだが、アベ

消息

秋田支局長 藤澤民之助
事務打合せの爲め七月六日東京
支局長 森 元治郎
ワルシヤ長 齋藤 壽
勤觀の歐州から八日歸朝
通信局長 齋藤 壽
病氣靜養中の處十二日より出社
編輯局長 岡村 二一

同十三日より出社
大阪支社長 福岡 誠一
事務打合せの爲め十三日東京
關門支社長 船木 重光
上
經濟局長 塚本 義隆
中京及び關西へ廿四日發出張
常務理事 上田 碩三
關西及九州へ廿九日發出張
横濱支局長 成田 周
事務打合せの爲め廿九日來社

リテイフの時間になるとホテルのテラスで音楽が始まる。私の行つた時は若いマドモワゼル達のバンドで眞白な輕快な服装の金髪娘達が、ワイオリンやピアノを弾きセロを抱いて居る姿は美しいものであった。熱帯の夜はいつまでも街のサンザメキが絶えない。

私もベットにつくのは午前一時、その日四度目のシャワーを浴びて、天井の扇風器を廻し放しにしてやつと眠りに入つた、佛印華橋六十萬、そのうち五十萬が西貢、シヨロンを中心集つてゐる、シヨロンは昔からの華橋街で西貢市とは殆どくついで居り人力車では十五分走れば行ける。これは完全な支那人街で歐州風な建築は一つも見られず、ちよつと廣州市を小さくした様な感じだ、私が街頭に立つて寫眞を撮つてゐると、支那人達が集つて来て聲高に支那語で悪口を云ふ。私が其奴らの顔を見ると露骨な敵意を見せてベツと足下に唾を吐いたりする。これら華僑達の一番大きな商賣は米だがシヨロン市の傍を流れて居る西貢大運河は奇妙な箱のやうな形をした米船の上り下りで非常な活氣を呈し、支那人といふものの根強い發展力を眼前につきつけられる思ひがする。

西貢驛から再び河内行き汽車に乗り、途中安南の首都ユエ(順化)を訪れる。海防、河内、西貢とも何れもヨーロッパ化した都會だが、このユエは本當の安南の町だ。ユエでこそ安南の空氣、安南の色彩、持味を見ることが出来るのだ。王城があり王様がゐる。王様はフランスで教育を受けた近代的な青年で本年廿五歳。スポーツが好きで、よくスカールを漕いだり馬に乗つたりドライブをししたり

二頁(つづく)

二頁(つづく)

リテイフの時間になるとホテルのテラスで音楽が始まる。私の行つた時は若いマドモワゼル達のバンドで眞白な輕快な服装の金髪娘達が、ワイオリンやピアノを弾きセロを抱いて居る姿は美しいものであった。熱帯の夜はいつまでも街のサンザメキが絶えない。私もベットにつくのは午前一時、その日四度目のシャワーを浴びて、天井の扇風器を廻し放しにしてやつと眠りに入つた、佛印華橋六十萬、そのうち五十萬が西貢、シヨロンを中心集つてゐる、シヨロンは昔からの華橋街で西貢市とは殆どくついで居り人力車では十五分走れば行ける。これは完全な支那人街で歐州風な建築は一つも見られず、ちよつと廣州市を小さくした様な感じだ、私が街頭に立つて寫眞を撮つてゐると、支那人達が集つて来て聲高に支那語で悪口を云ふ。私が其奴らの顔を見ると露骨な敵意を見せてベツと足下に唾を吐いたりする。これら華僑達の一番大きな商賣は米だがシヨロン市の傍を流れて居る西貢大運河は奇妙な箱のやうな形をした米船の上り下りで非常な活氣を呈し、支那人といふものの根強い發展力を眼前につきつけられる思ひがする。西貢驛から再び河内行き汽車に乗り、途中安南の首都ユエ(順化)を訪れる。海防、河内、西貢とも何れもヨーロッパ化した都會だが、このユエは本當の安南の町だ。ユエでこそ安南の空氣、安南の色彩、持味を見ることが出来るのだ。王城があり王様がゐる。王様はフランスで教育を受けた近代的な青年で本年廿五歳。スポーツが好きで、よくスカールを漕いだり馬に乗つたりドライブをししたり

する姿が見られるといふ。女王様が大變な美人だ。二つ違ひの廿三で、安南の豪商の娘だと云ふが、典型的な安南美人として有名だ。王様は内閣を持つて居り、その内閣が猫の顔ほどの王領の行政を行つて居る。陸軍もあるが兵員二百名で、主として王城の警備に當つてゐる。警備といふより寧ろ見物人案内係と云つた方がいふかも知れない。全く王様といふのは形式だけのもので、何の權威もなく、佛印總督の云ふがまゝになつてゐる哀れな存在だ。

### 政變手帳

### 荻外莊夏の陣

政治部 A 生

感じを受ける。家は黄色い土造で町はしつとりと舌ひて落ちてゐる。といふより氣力のない、精氣を失つた衰頹の空氣に満ちてゐる。實に静かで人間の數も少く、大きなユエ河を上下する舟も稀だ、ちよつと郊外に出ると昔からの王陵がある。これらの王官にしろ、王陵にしろ、支那文化の影響が強く殊に明時代の色彩が多い。ユエには時々附近の山岳地帯に住んでゐるモイ族といふ未開の土人が出て来ては獸皮等と食糧を交換して歸つて行く。丁度十人程の一群が出て来るのに逢つたが、筋骨隆々に禪一本裸で髪を長く伸ばして

ゐる。髪を伸ばしてゐるので遠くから見ると女に見間違へるが、實に精悍な面構へをしてゐる。彼等は未だに近親者が死ぬとその肉を食べるといふ食人の習慣を持つて居るのだといふ。

夜になるとユエ河に歌妓の舟が浮ぶ。支那の畫舫のやうなもの、舟中の寢臺に寝轉んで歌妓の唄ふ哀調切たる單調な安南の歌を聞いてみると、慮げられた安南の歴史が眼底に浮び、自己の運命への安南人の悲しい諦が胸をうつ。

じめ吉田、東條の登場があつたのみ——新屋秘書官が一時天幕村へ顔を出して『何も發表はありません』が何回となく續く社會部のU君嘆じて曰く『この動きが無くては徒らに、腕を蚊の餌食にするばかりだよ』——十九日午後三時松岡外、東條陸、吉田海相の二度目の登場があつた、これが近衛號の土臺石となる四相會談だ——終つたのが三時間半後の午後六時半だ、近衛公は薄暮の庭に下り立つて『話は済んだ』と明朗な顔で告げた。生みの惱みを續けた世紀の産室がこゝで漸くホッと一息入れたわけだ、しかし一息したのは向ふのことで報道陣は之れからが本腰とばかり四相を個別に攻め立て、辛くも骨組を嗅ぎ出した、こゝで屋根、壁、と矢張り早に出来て行くものと待ち構へたが、近衛さんはまた沈黙してつた、——二十日は伊藤文吉男岸工次官などオプザバー格が舞ひ込んだのみ——またや報道陣天幕村は荻外莊の木立越しに燦れたやうな文月と睨つて居る、二十一日——氣比べをつづける、二十一日——どうやら静は漸くにも動に轉るじ

氣配——姿なき大臣も入れて一舉に組閣が出来たのはその夜のことで、雲を得た蚊龍近衛公の電撃組閣ぶりだ、何もありませんの颯返しの藝一轉張の新屋秘書もこの頃からカチ／＼と折を打つて『臨時發表』と漸く人間の聲を聞かせる、天幕村の色めき立つたのは勿論——高校長の橋田邦彦氏は文相に、風見章氏は法相にと發表、同盟の同報電話はこの發表の先を行つて各社陣營の度臆を抜く、明ければ廿二日村瀬直義氏の法制局長官を又も各社を出し抜く、こゝ全く同盟陣の一人舞臺の活躍だ、この二日間に互る大勝にわれらは寝不足も暑さの疲れもスツ飛んで了つたのであつた、かくて荻外莊夏の陣營は全く同盟大勝利に引あげたのであつた、全日本の惱みを背つた再生近衛號はかくて遠洋に向つて解纜したのである。

### 出征社員慰問と家族慰安

### 家族慰安

大阪支社では酷熱の大陸に銃とる支社出身〇〇名の將兵を慰さめ勵まさんと職員以上三百支社員の總意により眞心こめた慰問袋を各自の醜金で作成、今回それぞれ現地に發送を了したがこれに先立ち七月三十日午後三時から江商ビル二階會議室に支社出身出征將兵の家族

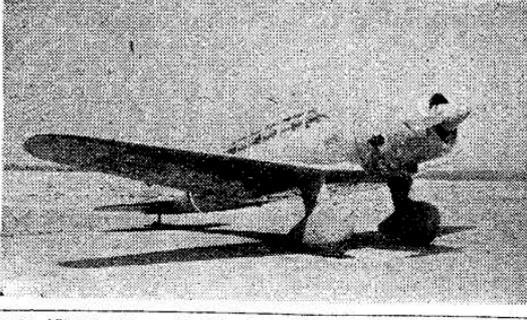
を招待して支社員主權の慰安會を催した。

福岡支社長、各部長ら多数出席、福岡支社長の挨拶、記念撮影のち日本ニュース映畫社の好意によるニュース映畫、國光映畫社提供の新日本文化映畫「奥村五百子女史」を觀賞、六時過ぎ意義深き會合を閉じた。

なほこの記念寫眞は直ちに現像の上家族に贈呈するとともに慰問袋のなかに收め前線へ送られたが支社員一同からの嬉しい贈物として歓迎されやう。

### 同盟第三號機命名式舉行

同盟航空陣の強化と現下時局に備へて、豫ねて快速飛行機の増備を計畫中、うち一機を完成、去る七月十日午後一時より官幣大社日校神社に於て命名式修式を舉行



松本編輯局長、大川航空部長、龜田業務主任、塚本經濟局長、細川機長、高橋、武田兩乘務員等列席、同社宮司祭司の下に嚴肅裡に執行はれた。同機は「同盟第三號機」と命名された、單葉單發九

### 感謝狀

從軍記者の榮譽

過ぐる晉南作戦に従軍晋南方面の戰況報道に活躍した前田廉(記者) 脇本誠一(無電)川口一男(映畫)の三君は今回、舞部隊長から左記の如き感謝狀を貰つた同盟が事變以來率先軍作戦に協力報國の赤誠を捧げ居るに對する現地軍表彰の一端であつて全社員の共に願つべき榮譽である。

感謝狀

前田 廉  
脇本 誠一  
川口 一男

右ハ今春晋南作戦ニ際シ當部隊ニ配屬セラレ太行山脈ノ重疊タル峻嶒ヲ攀ヂ或ハ幽谷ヲ涉リ幾多險難ヲ克服シクテ困苦缺乏ニ耐エ北支ニ於ケル敵只一ノ根據タル山西省南部ニ蟠居セル敵中央軍直系三ヶ軍約二萬八千ニ對スル神速放膽ナル包圍戰ヲ敢テ勇猛果敢ナル敵陣地ノ攻撃ニ當リ不眠不休寢食ヲ忘レ戰場ノ實相ヲ把握シ皇軍ノ不撓不屈奮闘力戰一死奉公ニ邁進スル眞相ヲ適時適切ニ報道シ將兵ノ士氣ヲ鼓舞セシハ勿論第一線ト銃後トノ緊密ナル連絡ニ寄與セシ所甚大ニシテ克ク其職責ヲ完遂セリ。

依テ茲ニ感謝ノ意ヲ表ス(各通) 昭和十五年五月二十日 舞部隊長 團

「香川邦彦少尉(編輯部) 嚴父深水氏、永坂健二君(經濟部) 嚴父銳夫氏、北川雅夫君(通信部) 母堂マサエさん、濱武雄君(寫眞部) 嚴父淺吉氏ら御家族合計二十三名並に寺西純育特派員夫人都奈子さん、中南支總局臨時在勤伊藤幹君夫人増子さん、故花房映畫部長長母堂八重子さん及び御家族等



